

第1回総合教育会議会議録

令和5年6月20日（火）

場所：国立市役所 第4会議室

出席者

市教育委員会	市長職務代理者	永見理夫
	委員	雨宮和人
	委員	山口直樹
	委員	操木豊
	委員	大野孝儀
	委員	佐藤有里

職員	教育部長	橋本祐幸
	教育総務課長	石田進
	教育指導支援課長	荒西岳広
	指導担当課長	川畑淳子
	指導主事	小島章宏
	指導主事	小柳津章文
	生涯学習課長	井田隆太
	学校給食センター所長	土方勇
	公民館長	清水周
	図書館長	氏原恵美
	政策経営部長	宮崎宏一
	政策経営課長	簗島紀章

国立市教育委員会

令和5年度 第1回総合教育会議 協議・調整事項

○コミュニティ・スクールについて

○旧本田家住宅復原後の活用等について

第 1 回総合教育会議会議録

令和 5 年 6 月 2 0 日（火）

場 所： 国 立 市 役 所 第 四 会 議 室

国立市教育委員会

○【橋本教育部長】 こんにちは。定刻になりましたので、令和5年度第1回総合教育会議を開催いたします。進行を務めさせていただきます、私、教育部長の橋本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。今後は着座にて失礼いたします。

初めに、当会議の主催者であります永見市長より、開会のご挨拶をお願いいたします。



○1 市長挨拶

○【永見市長】 皆さん、こんにちは。お忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。前回いつやったのでしたっけ。昨年の10月ですか。8か月も間が空いたと。本当にお久しぶりにお会いしたという感じがしますけれども、どうぞ1つよろしくお祈いします。

新型コロナの関係も5類になったということで、学校も原則マスクなしということなのでしょうか、様々な行事も通常どおり行われるよう努力されておると聞いております。そういう中で、子どもたちも元気に日常を取り戻しつつあるのかなというふうには考えているところでございます。改めまして、教育委員の皆様が国立の教育にご尽力いただいていること、この場をお借りして御礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

今日は議題としてコミュニティ・スクールと旧本田家住宅復元後の活用についてということで、意見交換をなささいという事務局の指示がございまして、まだ本田家住宅のほうはなじみがあるのですが、コミュニティ・スクールといいますとまさに教育内容そのものでして、私と意見交換は何ができるだろうかというよりは、皆様方のご意見を伺いながら、では今度は市長部局として、コミュニティ・スクールの推進していくに当たって、どのようなご支援を教育行政に対してしていったらいいのかと。これは財政面とか人的な面を含めまして、そんなことを考える1つの共通項として、ご議論させていただけたらと思っております。

もう一方、本田家のほうにつきましては今解体が終わったのか。あと2年で大体出来上がる、今年再築の補正予算も組ませていただいて、これからいよいよ工事に入ることですので、そろそろ完成後、文化財としての本田家と合わせてどのような活用が市民にとって、地域社会にとって望ましいのかというようなことも含めてご議論させていただけたらと思うところです。今日は忌憚ないご意見を伺えたらと思っておりますので、よろしくお祈いします。

以上です。



○2 教育委員会挨拶

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。続きまして、教育委員会を代表し、教育長よりご挨拶をお願いいたします。

○【雨宮教育長】 皆様、改めましてこんにちは。本日は令和5年度の第1回目の総合教育会議ということでございます。まず、コミュニティ・スクールについてということでございますけれども、経緯を私詳しく存じ上げているわけではないところですが、国立はなかなかコミュニティ・スクールに取り組むということが懸案、あるいは課題としてずっと残ってきたというのが現状でございます。令和4年度の都下26市の状況を見ますと、全く小中とも行っていない行政が8、それから全市、100%行っているのが9市というような状況になっているようなところですので。令和5年度からきつと新たに取り組んでいるところもあるのかなというふうに思いますが、その中の1つが国立であ

るところだというふうに思います。私名称を忘れてしまったのですが、多分市長は覚えていらっしゃると思うのですが、学校をコミュニティの基礎にするみたいな考え方ありましたよね。

○【永見市長】 教育コミュニティ構想ね。

○【雨宮教育長】 そうですね。それを考えると、国立というのは結構国がこういうことをやろうと言いつつ前に意外と先進的なことを思いついていたのだなというふうにちょっと思ったところがあります。これからも地域というのはどんどん少子化、高齢化があつて、少しコンパクトになっていくのかなみたいなものがある中において、学校の子どもたちも少なくなっていくという中、一体となっていくということは非常に大切な要素ではないかなというふうに思っていますので、まだ国立市の教育委員会では正式に実施するという意思決定をしたわけではありません。新年度からやっていきたいというような形で、教育委員会内部に学校の先生方にも検討委員会つくっていただいて、どのようにしていこうか。小学校1校、中学校1校はこういう形でやっていけるといいよねというところまでは一応方向性は見だしておりますので、各委員さんの思いみたいなものを聞かせていただけるといいのかなというふうに思っています。

それから、旧本田家住宅もいよいよ復元工事が始まるということで、町場の旧国立駅舎に次いで、南部地域での1つのにぎわいの拠点になるというようなことも当時私も少し関わっている中においては思いとしてはありましたので、なかなかあのような機能で、では人がどういうふうにやれば来ていただけるのかなみたいなところを、これも各委員さんの忌憚のないご意見等を頂けるといいのかなというふうに思っているところでございます。限られた時間ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。

教育委員の皆様からも一言ずつお願いしたいと思います。最初に、教育長職務代理者、山口教育委員、お願いいたします。

○【山口委員】 山口でございます。年に2回の総合教育会議ということで、永見市長とこういうふうにいろいろな話ができる場面があるということはすごくいいことだし、必要だなというふうに改めて今感じているところです。コロナの状況が大分変わってきて、まち自体も活性化してきたというか動きが元に戻るというか、非常に動きが出てきているなど今感じているところで、その中でコミュニティ・スクール、学校と地域の連携の話だと思えますし、国立の中の大きな財産である本田家についてということも、ここら辺と合わせて考えると、ちょうど今のタイミングだと広がりを持っていくことの必要性がちょうどタイミングよく出てきたかなというようなこともちょっと感じているところでございます。今日はよろしくお願いいたします。

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。続きまして、操木教育委員、お願いいたします。

○【操木委員】 こんにちは。操木でございます。よろしくお願いいたします。

コロナが落ち着いてきたということで、毎日子どもたちの登校や下校の様子を見ていますと、やはり変わってきました。学校で日常の生活が戻ってきて、子どもたち同士が会話をしたりということで、それが登下校の姿にも現れてきているなどということを何となく毎朝子どもたちが通うところを見ていて、そんなことを感じております。

今日はコミュニティ・スクールということと、それから本田家という2つのテーマなのですが、コミュニティ・スクール、いろいろなところで始めている地域たくさんありますけれども、やはり最終的にはそれぞれの地域の特色を生かしたコミュニティ・スクールかなというふうに感じます。

ですから、国立らしさ、国立らしいコミュニティ・スクールというものがみんなにとって構築できていけばいいかなと、そんなふうに思っております。今日はどうぞよろしく願いいたします。

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。続きまして、大野教育委員、お願いいたします。

○【大野委員】 今日はよろしく願いいたします。自分の経験から言って、長年私学にいたので、そこでは地域とか誰か巻き込んでというような動きはなかったのですが、恐らく今もないと思うのですけれども、なかなかそういう地域の皆さんと共にとというようなイメージが私の中になかったのです。何とかそれをイメージしながら、今日はいろいろな質問とかこの辺はどうなのでしょうというような話に終始するような気もするのですけれども、よろしく願いいたします。

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。続きまして、佐藤教育委員、お願いいたします。

○【佐藤委員】 よろしく願いいたします。谷保の田んぼの水が流れていなくて、台風で水門が壊れてしまって、私知っている谷保でも今水が入っていないというのは初めてなのではないかなというふうに思っていて、農家さんがすごく困っているのではないかなと思っています。中学生全員で手植えをすとか、中学生の出番ではないかななんていうふうに思っていたり、本当に地域の課題をどう解決していくか。いろいろな工夫をしながら、国立スタイルというもので教育ができればいいかなんていうふうに日々思っています。よろしく願いいたします。



○3 配付資料の確認

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。それでは、お手元の配付資料を確認させていただきます。

次第がありまして、その後にコミュニティ・スクールの関係、総合教育会議資料1です。それから、旧本田家の関係の資料で、総合教育会議資料2-1、2-2、2-3と、それから本田家の住宅のパンフレット、以上でございます。過不足などございますでしょうか。大丈夫そうでしょうか。ありがとうございます。



○4 協議・調整事項

○【橋本教育部長】 それでは、続きまして協議・調整事項(1)「コミュニティ・スクールについて」でございます。

コミュニティ・スクールの体制づくりに当たりまして、国の動向や法改正、コミュニティ・スクール設置のイメージなどを示し、今後どのように対応していくのかにつきまして、教育指導支援課長より説明をさせていただきたいと思っております。荒西さん、よろしく願いいたします。

○【荒西教育指導支援課長】 それでは、市立小中学校のコミュニティ・スクール化についてご説明をさせていただきます。

まず、概論です。現在、子どもたちを取り巻く環境や学校が抱える課題が複雑化、多様化する中で、地域と連携、協働して取り組む社会総がかりでの教育の実現ということが不可欠な世の中となっております。今まで取り組んできた開かれた学校からさらに一步踏み出し、地域と共にある学校というものへの転換を図る有効なツール、それがコミュニティ・スクールになります。

お手元の資料の2ページ目を御覧ください。平成27年の中央教育審議会答申によりコミュニティ・スクールの重要性が確認され、その後、平成29年の地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正により、コミュニティ・スクールの設置が努力義務化されました。さらに、資料内の制度面での改善

にあるとおり、学校がコミュニティ・スクールしやすい改正もなされて、現在に至っております。

本市においては、平成30年度より学校評議員会制度を導入し、地域の方の意見も伺いながら開かれた学校づくりを目指してまいりましたが、不登校児童生徒への対応やフルインクルーシブ教育に向けての取組、それから全都的な教員不足の課題等と向かい合わなければいけない状況が続く中で、学校だけで対応していくという体制を転換いたしまして、家庭、地域のお力をこれまで以上にお借りしながら、学校運営を行っていく必要が生じてきているということから、コミュニティ・スクール化を検討することといたしました。

具体的にどのように変わるのかということについて、資料の2ページ目を御覧ください。まずは、新たに学校運営協議会、こちらを設置いたします。本市においては、既存の学校評議員会を基に再構成していく形になるというふうに考えております。学校運営協議会は、一定の権限と責任を持って学校運営に対して意見を述べていく合議体でございます。資料の図にあるとおり、主な機能として、学校運営の基本方針を承認する、それから学校運営について市教委または学校に対して意見を述べる、教職員の任用について市教委に意見を述べるといったものがございます。

次に、地域学校協働本部、こちらを設置いたします。資料3ページを御覧ください。現在においても、地域学校協働活動と呼ばれる活動は様々に実施してございます。ゲストティーチャーを活用した郷土学習、それから放課後の活動としてのほうかごキッズ、放課学習支援教室A S S、それから地域未来塾としての公民館L A B O ☆くにスタ、その他登下校の見守り、P T Aによる教育活動支援、育成会によるイベント、町内会のお祭りなど、資料3にある活動は既におおむね実施してございます。これらの活動について、それぞれの団体等の参画によって形成された緩やかなネットワーク、これが地域学校協働本部になります。

資料4ページ目を御覧ください。この会議により、それぞれの取組を共通理解したり課題を整理したり、新たな取組ができないか検討したりしてまいります。学校と家庭、地域をつなぐ重要な役割を果たすのが、新たに指名する地域学校協働活動推進員です。資料にあるとおり、社会教育法に基づき、教育委員会が委嘱する地域住民と学校との連絡調整等を行うコーディネーターです。この人材の活用により、これまで主に副校長が様々な業務の傍らで行ってきた家庭や地域への協力依頼、それから連絡調整等がスムーズに行われるようになりまして、学校と地域が一体となった教育活動が一気に前進するというふうに考えております。

続いて、資料5ページを御覧ください。これから検討委員会にて具体化をしてまいります。現時点での本市のコミュニティ・スクールのイメージでございます。学校運営協議会については、現行の学校評議員制度を踏まえて1校につき5から10名の委嘱、それから年間3回の開催が妥当なところかというふうに考えております。学校運営協議会の権限につきましては、校長の学校運営に協力していくスタンスになるように規則等を整えていきたいというふうに考えております。右の地域学校協働本部につきましては、そこにあるような構成で地域学校協働活動推進員、こちらは各校1名、週4時間の活動ができるように謝礼をお支払いする形で指名ができればというふうに考えております。

今後のスケジュールですが、令和6年度はまず小学校1校、中学校1校、これは国立第四小学校と国立第三中学校でコミュニティ・スクール化を進めまして、翌年、令和7年度は小学校2校、中学校1校、令和8年度に残りの全ての市立小中学校といった形でコミュニティ・スクール化を進めるという提案をしていきたいというふうに考えております。今年度につきましては、コミュニティ・スクール検討委員会を7月に立ち上げ、第1回目は文部科学省から指定されているCSマイスターと呼ばれ

る方をお招きして、本市の体制づくりについて具体的な助言を受けたいというふうに考えております。

今後決定がなされればコミュニティ・スクール化に伴う予算についてご相談させていただくことになると思います。内容によっては国や都から3分の2の補助金が獲得できるものでございます。ぜひご検討いただければというふうに存じます。

説明は以上です。



○ 意見交換・質疑応答

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。

ただいまの説明に対する質問も含めまして、市長を座長としてフリートーキング形式で協議をお願いしたいと思います。それでは、永見市長、よろしく願いいたします。

○【永見市長】 振られましたので進行しないといかんから言うのですが、今の説明で皆さん十分ご理解いただけましたでしょうか。ご意見を集約しなければいけないということですので、よろしいですか。何かご質問ありますか。僕は分からないことだらけ。どうぞ、山口委員。

○【山口委員】 すごい細かな質問で、今5ページのところの最後にCSマイスターという言葉が出てきたのだけれども、もうちょっと、イメージがいま一つ分からないのですけれども、説明していただければ。

○【永見市長】 どうぞ。

○【荒西教育指導支援課長】 CSマイスターなのですけれども、文部科学省がコミュニティ・スクールの推進することを目的に指定、指名をする制度でございまして、こちらは各校各自治体をお願いをしますと派遣をされて様々なご助言を頂けるという方でございます。既にコミュニティ・スクールの中で重要な役割を果たしていただいている方であるとか、そういった活動に様々な精通している方をご派遣いただくということで、今回そのような方にご助言いただくこととしております。

○【永見市長】 よろしいですか。ほかに。では、それぞれ皆様に振りますのでご意見を、と振る前に私が何か一言言わなければいけないだろうから。

先ほど教育長が教育コミュニティの話をされたと思うのですけれども、私の記憶では恐らく30年ぐらい前の話で、徳永さんが教育長時代の話です。これが当時成り立たなかったのです。潰されたというのが現実ですけれども、議会含めて。それはある意味で言うと、どう言ったらいいのか。国立におけるコミュニティというものが、いわゆる協働関係がなかなかつくれない。だから一緒になってものをつくっていくというコミュニティではなくて、どちらかというところと反対のためのコミュニティのようなことが当時かなり先行的で、課題がたくさんあって、矛盾があるのではないかというようなことで潰れたというような。それから30年たって国立のコミュニティがどういうふうに学校の経営とか教育をどう盛り立てていくように、協働していける時代になってきているのかということが問われるような気がします。

その教育コミュニティ構想のときに、実は私も見に行った学校がありまして、それは台東区の浅草小学校なのです。あそこはそんなに格好いいことを言わなくても、当たり前におじいちゃんもおばあちゃんも、3代前から浅草小学校の出身だよと。当時は沢村貞子がいて加藤何とかがいてと、ああいいう歌舞伎系の人たちとかみんな浅草小学校を卒業していて、学校の伝統なんていうのは必然的に出来上がっていて、地域の共有財産なのです。ですから、地域の人たちがそこを活用して、支援をすることも当たり前だし、地域の人たちが地域の活動に使うことも当たり前だと。その頃の国立はどうだっ

たかという、一般の人が入ってきたら教育の邪魔だからというので、もう占有意識が強くて、学校自体もシャットしているというような状況がありました。そういうギャップがあつてなかなか突破できなくて、その構想そのものは潰れてしまったのですけれども。

では今、果たしてこの学校、コミュニティ・スクールと言われているものが何を改善しなければいけないのか。先ほど抽象的に今の教育が抱えている課題を言っていましたけれども、国立における課題というのは何だろう。では、不登校という課題があるとするならば、それがコミュニティが関わることによってどう改善できるのか。そういう道筋が見えていないというふうに思っているのです。それから、地域でコミュニティの質が全く違うのと、それから地縁的コミュニティがかなり、ますます弱くなっていて、目的別コミュニティのほうへ地域社会が移行しているときに、この地縁的コミュニティを軸にしたような形でつくれるのだろうか。

だから、これを考えていく上で相当工夫をしながら、でもなおかつ地域の力なしに教育の質の向上とか多面性を確保するということはできないわけですから、果敢に取り組んでもらいたいなと僕自身は思っていますけれども、そんな課題を乗り越えてやっていっていただけたらいいなと私自身は思っています。私は専門家ではありませんので深くは申し上げられないのですが、皆様からご意見を聞いていけたら、意見交換できたらなと思いますので、よろしく願いたします。

では、どちらから回しますか。操木委員から回しますか。

○【操木委員】 ありがとうございます。

「開かれた学校」なんて言葉が出てきた頃から、特に地域との連携とかということとは学校などでは随分意識をしてきていたな、なんてことを思い出しているのですけれども、私も幾つかの学校に勤務させていただき経験がありまして、やはり学校が変わると地域は当然違いますし、求めているものも違うのです。ただ、求めているものと学校の経営者、校長が同じ方向を向いているとすごくまとまって力になるのですけれども、さっきちょっと反対のためのコミュニティなんて話も出ましたけれども、それだとやはりお互いによくないわけです。ですから、そういったものをつくるのではなくて、やはり子どもたちを視点においたコミュニティ・スクールということが一番考えていかなければいけないというふうに思うのです。

今おっしゃったように、私も回る中で、本当に学校ができてまだまだ年数がたっていないような、そういうところもありましたし、本当にすごく歴史のあるところもありまして、また浅草の学校なども何度かもうお邪魔しているのですけれども、どちらが先かという感じですよ。学校ではなくて、地域があつての学校という、それが今目指しているこのコミュニティのゴールというか、目指すところかななんて思っています。

やはり地域あつての学校ですので、地域の声を聞いていくということ。聞いていくのではないですね。一緒に、参画という言葉がありましたけれども、まさにそのとおりでして、本当にそれぞれの地域というか、今国立でも学校数少ないのにもかかわらずやはり学校ごと、地域ごとにすごく課題とかあつたりすると思うのですけれども、それをやはり多くの目で見ないと見えてこないというところがありますので、より多くの方がまさに一緒に参画して、そして学校を、教育を進めていくということが大事ななということを常に思っております。

では、そのために何をしたらいいのかということこれからもっと具体的な話をしていかなければいけないのですけれども、まず第一番目にそういった目指すべきものを、方向性をしっかりまとめていくことが大事なななんて思って、そういうところを狙っていきたいななんていうふうに思いました。

まず1人目ですので、このくらいにさせていただきます。

○【永見市長】 ありがとうございます。では、私学にいらっしゃった大野先生、いかがですか。

○【大野委員】 ちょっと具体的な問題というか、話として、あるきっかけで通学路に見守りとして立っていらっしゃる方と知り合いになったのです。その学区はぎりぎりで、その人がいないとそこは誰もいないという、そういうところで、横断歩道があって確かに危ないところなのですが、その人の話をしているときでも、山が好きな方で、山に行きたいときがあるのだと。それからあと法事とか、そういうときはお願いしてもいいだろうと言われて嫌だとは言えないので、だからそのときはやりますと言って引き受けたのです。

その見習いとして雨の日には立っているのですけれども、結局ある学区では、ある学校の周りでは物すごくそういうコミュニティが盛んで、見守りのボランティアもいっぱいいる。半面、危ないけれどもなかなか出ない地区もあるというところがすごく今悩みなのです。その1つとして、こういうコミュニティ・スクールが確立すれば、今誰がやるかというとき多分副校長が一応中心になっていると思うのですけれども、なかなか多忙で何か人を集めるということまではできないと思うのですが、そういう仕事を中心になって積極的にやってくれる、そういう人がいれば見守りに関してはすごくありがたいのだけれどもなど切なる願いがあります。

あとは、やはり今アクティブラーニングとかいろいろ言われていますし、トークアンドチョークというのはもうそんな先進国でやっているのは日本だけだというような言い方もされるのですけれども、ちょっと外国の様子はつぶさには分からないのですけれども、ただ現在進行している現実として、やはり先生が授業をして、そこで児童や生徒はその先生の授業力というか心意気に胸打たれて、それでよし勉強するぞと、そういうのが今の日本の現実で、それを私は今現在否定することはできないと思うのです。だから、できるだけ先生方が生き生きとした姿を生徒児童の前で示せるような、そういう環境というのをつくる必要があるのかなと思います。

私が勤めていたのは、一筋40年以上同じ学校にいましたけれども、先輩の先生から聞いたのですが、昔は授業時数が多かったと。しかし、今のほうが忙しいと、授業時数は減っても忙しいと。それはどうしてか分からないのですけれども、やはり世の中そういうものみたいなのです。

アメリカでもインターネットが普及して、それはもう10年、20年前のNHKの番組でしたけれども、その頃インターネットということも私もよく知らなかったもので、それが便利になってどんどんどんどん時間が生まれるかと思ったら違うのだと、このNHKなんかでは忙しくなるのだと。そういうこともあるのだと思うのですが、やはりどんどんどんどん忙しくなってきたら歯止めがかからないというのが、そういう現実があるなと思うのです。

だから、なるべくそれは放っておいたら忙しくなる一方なので、何とか肩代わりできることがあればそれをやって、そして先生にゆとりを持ってもらって、生き生きとした姿で教壇に立つということが必要な、教育では根幹かなというように私は考えます。だから、そのために、そうすると何か学校の下請けみたいな感じにも取られるかもしれないのですけれども、今困っているところをやるのが先決かなというふうに思います。

読むと、学校への教育目標を設定したり経営方針とか、それに対しても合議制で、それに対して意見を述べたり、人事権に対しても反対を述べられるということも書かれているのですけれども、ときとしてぶつかって止揚するというのですか。それをさらに高いものにとということも考えられなくもないのですけれども、各学校を回っていてそんな全然、これは学校目標がちょっと違うのではないかな

というふうに指摘を受けるところはないので、それぞれの特色の学校目標を持って進んでいると思うので、そこにはなかなかこれはまずいのではないかという意見は出ないと思うのです。

だから、さっきの話に戻りますけれども、いかに見守りのところで何とかできるような時間を割いてもらえる、そういう人がいると有益だなというふうにはまず思います。

以上です。

○【永見市長】 ありがとうございます。さあ、どっちへ行きましょうか。地域の視点から佐藤委員どうですか。

○【佐藤委員】 学校帰りに我が家にビワの木があって、ビワの実がなっていたので、通りすがりの低学年の子と一緒に取って食べたのですが、これはやってはいけないのだと言っている子もいたりして、でも私がいいよと言っているからいいとか、地域の大人の方がそのときいいよと言ったものはいいと思えるような関係性とか、そういうのは谷保村の文化だったのではないかなというふうに思っていて、本当に困っている人がいたらすぐ助けるとか、誰が子どもの面倒を見るのか決まっていなくても助けられる人が見るという子育てをしてきた農村で、よい文化が、ゆったりとした時間が流れてきているのではないかなと思っていて、そんな緩やかな関係があったからこそPTAだったり子ども会だったり、町内会だったり機能がきたかなというところを、ちょっと頑張らないと消えていってしまいそうな気がしますので、そのあたりはその価値を見直せる時間がつくられたらいいかなと思っていて、この緩やかな関係、ネットワークはどうか保っていけるように工夫していけたらと思っています。

国立は自転車で動けるほどコンパクトにできるまちなので、芸術に特化する学校があったり、スポーツだったり農的な活動だったり、そういった特色をもっともっと出していく学校づくりもいいのではないかなというふうに思っています。コミュニティ・スクールの例で、大阪、関西のほうではオーケストラの本物の音楽を子どもたち全員に授業だったり放課後だったり、機会をつくっているようなのですが、そういった本物に出会う機会をつくっていったらいいなというふうに思います。

4月、5月、コミュニティ畑に教育センター主催で、教員の先生方や子育て支援センターの方々も含めて視察に来てくださる機会があって、そうすると困っている子どもたちや不登校の子どもたちが行く先でそのコミュニティ畑の情報も得ることができて、安心した関係の方から紹介していただくことによってまた動きが出てくるなというふうに感じました。

具体的には、コミュニティ畑にいる烏骨鶏を抱っこしたら学校行ってくるとか、先週も、つい最近の話ですが、中学生などでもやる気がなくて高校など行かなくていいと言っていた子がやはり高校に行くことにしたよとか、畑で出会った変わった大人たちと話すことによって、大工さんになってみようかな、林業やってみようかな、農家さんの仕事も見られてよかったなということを知ったりして、自分の可能性が広がったというお話を本人から聞くことができて、そういったことがいろいろな場所で繰り返される形になっていくといいなというふうに思いました。

私としては、教育に予算をつけていくまちになってほしいなというふうに思っていて、このコミュニティ・スクールも学校教育の枠が広がるというふうに考えていいのではないかなというふうに思っています。もちろん緩やかな関係の中で、ボランティアで手伝ってくださる方も必要ですし、しっかりと対価をお支払いして子どもたちが学校以外でいろいろな体験ができることということも、国立市の大切な教育費の価値として捉えられるといいなと思っています。

○【永見市長】 よろしいですか。では、山口さん。

○【山口委員】 今佐藤委員が言われたことを引き継いでしゃべってしまうと、今お聞きして思ったのは、子どもが成長していくということは、いろいろな場面でいろいろな体験をして、いろいろな人と会うことによって成長していくのだろうなというふうに、私も本当にそう思っているのですけれども、そのことを今語っていただけたかなというふうにすごく思います。

今、やはり学校教育委員をずっとやらせていただいているのは、やはりどうしても学校が全てを中心であって、学校の中で子どもの成長が基本的には図られていくというのが大前提で過ごしているような気がするのですけれども、私はそのことによって、子どもが窮屈になったりとかということが出てきている可能性は否めないのではないかなという部分、学校教育の果たしていることはもう絶対的に大きいことであるのは大前提ですけれども、子どもの成長、子どものいわゆる社会的なことも含めた教育ということと言うと、学校以外の場所が持っている役割はすごく大きいと。そこに目を向けていくことは絶対必要だなというふうに思っていて、このコミュニティ・スクール構想も非常によく見えない部分もあるのですけれども、基本的には学校を強くしていくという構想であるような気がするのですけれども、よくよくしっかり見ていくと、いろいろな可能性が逆に秘められていると。様々なことの場面で子どもが成長していく場面をつくることができるというのも絶対あるような気がするので、いい方向にそれを活用していくことができれば。

多分、昔国立市が考えられていたというコミュニティという部分も、学校という部分をてこにしつつ、地域の成長というのですか、地域の活性化。その他のことも図っている気もするのですけれども、今回、逆にこのことによって、学校というか、このことに関わる人がそれぞれまた新しい気づきが出てくる。それが次に子どもにつながっていくし、学校の校長先生にも関わりが出てくるので、いろいろな相互作用が生まれる可能性はあるかなと。

ただ、やはり構想だけ細かく見ていってしまうと、教育委員をやっているいろいろな学校を見て、校長先生がいろいろなところから来られて、学校で校長先生代わられたりしていく中で、僕自身は、校長先生が代わられて、やはり見ていると学校の雰囲気は変わります。そのことは絶対必要なことなのではないかなと実は思っている部分があるのです。そのこと自身が子どものプラスアルファ、プラスの成長につながっているだろうと思う、先生方もそうですけれども。そういうふうに思っています。

運用の仕方ですけれども、そのことにブレーキがかかってしまうおそれも十分あるだろうと。要するに、コミュニティ・スクールの学校運営協議会がかなりしっかりしてしまうとその学校のイメージというものがちっとできてしまって、校長先生が代わってもこの学校の方針は同じですよということになってしまうとマイナスになるだろうと。これはそういうもろ刃のやいばを含んでいる部分もあるのかなと、ざっと見ただけですけれども、それも感じた部分があるので、そこをうまく、関わる方々もそこら辺をしっかりと考えた上で関わっていただくということが同時に必要になってくるのかなと。多分先ほどご説明いただいたSCマイスターさんは、そこら辺も十分心得たアドバイス、サポートしてくださるのではないかと期待をしているのですけれども、ちょっと最後は細かな話になりましたけれども、以上でございます。

○【永見市長】 ありがとうございます。教育長、ありますか。

○【雨宮教育長】 少しだけ。

○【永見市長】 トータルで。

○【雨宮教育長】 いやいや、まとめとかそういうことではなく、当然先ほども申し上げたように校

長先生を中心にした教育委員会内部の検討委員会で様々な、これから議論を経て一定の考え方が出てきて、教育委員の皆様とまたそのことについて議論をする機会は別途あるのだろうなというふうに思っています。

今、本当に先生方が学校の中で背負っている部分というのがすごく重荷になっている部分もあるのではないかなというふうに感じているところでございます。それを今もいろいろな形で、この地域学校協働活動という形でほとんどこういうことはやられていますというふうに先ほど事務局が説明していただいたのですが、さらに地域の方々あるいは先ほど佐藤委員がおっしゃった一流の音楽みたいな取組がなされているということで、国立の地域にもいろいろな、そういうノウハウなり知見を持っていらっしゃる方々がこの学校運営協議会の中に関わっていただいて、そういう多様性を子どもたちが感じて、新たな学びとかに結びつけていけるような1つになるのではないかなというふうに思っています。それは当然義務教育なので、知識だとか学力の習得というのは当然必要なのですが、それ以上にキャリア教育みたいなものに資する部分というのはもっとあるのではないかなというふうに思っています。

それから、こういうふうになったらいいなと思う部分は、外部の人が入ってきて、児童生徒の気づきなり何なりに資するということはあるのですが、逆に児童生徒も学校から外に出ることによって、もしかしたら地域の課題みたいなものを解決できるのではないかなというふうにちょっと考えたりもします。

そうすると、学校だけではなくて市行政が抱えている課題とか、そういうものの解決の一助になり得る可能性もあるのかなんていうふうに思っていますので、そういう存在に学校がなり得たらいいのかなというふうにちょっと個人的には考えています。

簡単ですが以上です。

○【永見市長】 ありがとうございます。今日1時間半で終わるということですが、もう45分過ぎて、もうあと深めようがないのですが、今様々なご意見伺ってしまして、さらにもう一回これはしゃべっておかなければというのは操木先生ありますか。しょっぱなでしたからしゃべり切らなかったでしょう。

○【操木委員】 いやいや、そんなご配慮は。

幾つかお話を聞いている中で違うのではないかなということも思ったのです。私は公立学校と私立の学校と両方に勤務した経験があるのですが、公立にいたときには子どもたちが通うところが学区と。その地域、それが地域だというふうに、こういう認識ですと来ていますし、今もそう思っております。私立で考えたときには、子どもたちがすごく広範囲から通ってきますね、遠距離から。そうすると、どこまでを地域と考えるかという、最終的にはそこまで追えません。ですから、学校が存在するその周りを地域というような捉え方をして、やはり私立であっても地域との交流はあるのです。なければ生きていられないというのですかね。ですから、やはりそういったところは公私にかかわらず、地域というのがあるのだということを申し上げたかったということ。

2点目は地域に助けてもらうという、本当に助けてもらってきまして、今の国立の学校のほうも地域の方にたくさん助けてもらっていますけれども、学校が困っていることを出して、そして地域に助けてもらうというのはコミュニティ・スクールではないですね。

やはり学校も今の自分たち、学校にとってどういう課題があるのかなということをみんな考えて、みんなでもって取り組んでいく、つまり参画がコミュニティだと思うのです。

一方的に学校で「こういう内容を助けてください、応援してください」と言うと地域の人はもうすぐ応援して下さいますけれども、それは共につくり上げるコミュニティ・スクールではないなというふうにお話を伺っていて思いました。

それから、校長が代われれば学校が変わるというお話、先ほど私もちょっとしたのですけれども、実は校長も学校が変わると変わるのです。だから、1校目の校長の姿と2校目の校長の姿が違っていたりとか、自分自身も振り返ってそう思う。私も5つの学校で小学校の校長をやってきたのですけれども、やはり変わるのです。

それはやはり地域からすごく力をもらい、影響というのがある。変な意味の影響ではなくて、その地域の力から学ぶことは多いと思います。やはり一緒にやる方がいいのかななんて思います。最初、いろいろなご意見を賜ったときに、本当に学校のことは任せて下さいなんていう気持ちもあったのですけれども、やはり学校だけだとやり切れません。それから、見ているところも見える課題もやはり視点が違くと、立場が違くと違うのです。だから、そういうところをみんなで出し合って共に進めていく、そういったコミュニティ・スクールになればいいなというふうに思いました。

○【永見市長】 ありがとうございます。困りましたね、時間がなくて。これだけやってもあと1時間半ぐらいかかりそう。

○【山口委員】 今のはまとめに近い、共につくり上げるというのは。

○【永見市長】 それで、僕のほうからちょっと次の議題行かなければいけないので、今様々出たことは教育委員会の事務局のほうで受け止めていただいて、そしてまた教育委員さんとは教育委員会と事務局は十分話し合う機会あるわけですから、そこで意見を斟酌してやってもらったらいいなと思うのですけれども、市長部局のほうから見たときに、学校は開かれた学校、開かれた学校と言うのだけれども、地域を信頼しているのだろうかということがあって、ある時間になると鍵閉めて、防犯カメラで安全安心は機械と扉で守るのだみたいな。実は地域の目で守られなければいけないものが、そこに安全安心の基本があるにもかかわらず、誰が入ってくるか分からないからシャットして。そういう体制をもっともっと地域の人を信頼して、そこに共同参画をして学校をつくり上げていくというような体制を意識と、それから実態面で変えていけるのかどうかというようなことを、本当にどうやって実践の中でつくり上げていくかというのは1つの例だけれども物すごく大きいことかななんて思います。

それから、2点目は、市長の立場で言うとこれ、本当に大きな改革なのだなという気がします。先ほどご説明あったように、学校運営の基本方針について承認をするのですよね。あえて言えば議会みたいなものですよね。地域の承認がなければ、学校運営の基本方針がつかれない時代が来るということですよね。

では、その学校運営協議会がどういう地域の意向を充分斟酌したメンバーで構成し得るのかどうか。あるいはそれだけ参画してくれるお気持ちとか、そういうものが本当に構成できるのだろうかという、ある意味トライアルの部分がたくさんあって、しかも人事について、任用について、うちが任用するというのはなかなか難しいことだけれども、任用についてまで意見を。では果たして「うちは芸術を中心にやるから、音楽教員を少し多く任用してください」とやって、都教委が認めるのだろうかという。そういう、ここに書かれている理想とギャップみたいなものを感じるわけで、そんなことも十分議論してもらったらいいなと思います。

それから、3つ目は、これは事務局と打合せやったときに、この学校の今回のコミュニティ・スク

ールというときに、コミュニティ・スクールに求めている子どもたちの意思はどこに入っているのだろうかということがこのレジュメにほぼ書かれていないのですよね。要するに、子どもの条例とかをつくって、子どもの意見表明権があって、そしてそれを最大限斟酌しながらどういうふうに組み立てていくかといったときに、協議会があって学校長のリーダーシップがあって、教員がいて、子どもの視点が全然ここに書かれていないのです。そういうものをこういう学校運営の中でどう取り込んでいって、地域との中にどう、子どもも主体であって客体ばかりではないということをどういうふうに捉えていくのか。これは市長部局のほうで今子どもの基本的な条例をつくっていますから、そんなことも十分検討してもらえたらなんて思います。

最後に、今日のことを言いますともう時間ないのであと2、3分。この会議の前にNHK学園の新しい理事長さんをご挨拶に来て、約1時間やったのですけれども、様々な人が様々な形で全国から、あるいはこの近県から集まっている。だけれども、先ほど操木先生おっしゃったように、どういうふうに地域の中で生活するのか。体験をすることということが極めて重要で、どういう人材が国立にいらっしゃるのか、あるいはどういう人と出会いがあるといいのだろうか、そういう機会が国立の中にあるのだろうかという、そんな議論を実に真剣になさっていました。私学でしかも通信系の学校で、スクーリングでしか来ないのだけれども、その中で特徴的だったのは、非常に困難を背負って中学校まで行って、通信制の学校へ入った子どもたちは非常に控え目な子どもたちが多い。ところが、ある出会いがあったり、ある経験を積むことによって、ぐんと伸びていく。そういうきっかけがある。それは個人によって全部違うのだけれども、それをどういうふうに、地域の中に見いだしていくのか、学校の中に見いだしていくのか。それをどうやって創造していくのかということが、やはりそういう困難を抱えた人たちが集まってくる学校の大きな特徴で、それを個別的に画一化できない。まさにこれも個別的に画一化してしまったら、全然弾力性のないコミュニティ・スクールになってしまうので、そんなこともぜひ参考にしてもらえたらと思います。

最後にもう1つ、この中でより重たいなと思ったのは、地域学校協働活動推進員という方が全てのコーディネートをすることになっています。しかもボランティアでやるのです。これって本当に困難だと思う。この絵空事を書いた人が文科省の誰か知りませんが、本当に地域のことを分かって書いているだろうかという思いがします。

さっきの佐藤委員の発言で様々なことがあって、ではこれコーディネートって、全部1人の推進員がコーディネートできるのだろうかという、そんな気持ちもありますので、そんなことも。別にだから駄目だというのではなくて、そういうことも含めてよい方向に持っていただけたらというのが市長からの思いですので。その辺でとめざるを得ないので、今日は。また次の機会でもあれば、またそんなことをしてもらえたらと思います。

では、次の議題行きます。本田家さんのほう。

○【橋本教育部長】 いろいろご意見ありがとうございます。

それでは、次の協議・調整事項に移りたいと思います。

協議・調整事項（2）「旧本田家住宅復元後の活用等について」でございます。

旧本田家住宅の沿革や価値、資料、これまでの経緯と今後の予定などにつきまして、生涯学習課長からご説明をいたします。では、井田課長、お願いします。

○【井田生涯学習課長】 それでは、旧本田家住宅の沿革、価値、現在行っております解体・復元事業のスケジュール、また現時点での活用案などについて説明をさせていただきます。

最初に、旧本田家住宅の沿革と価値についてでございます。沿革について少し触れたいのですけれども、薄緑のパンフレット、こちらをご用意いただきまして、一度表紙から開いていただいて、左側に「本田家とは」と書かれた部分でございますので、そちらを御覧ください。本田家でございますけれども、もともと群馬県であったり埼玉県の川越に住んでおり、馬医や調馬を家業としていました。また、家伝によりますと1624年から1643年頃に谷保に移住してきました。それ以降は谷保の地で馬医や調馬にとどまらず、地主・名主、医者、文人・書家として地域で活躍をされてきました。

続きまして、パンフレットのそのまま一回開いた状態の右側です。「本田家住宅について」というところがございます。そちらを基に価値について少しお話をさせていただきます。旧本田家住宅の建築年代は特定されてはおりませんが、残されていました祈祷札より1731年以前に建てられたと考えられております。併せて資料2-1を御覧いただきたいのですけれども、1ページ目の中ほどに令和2年3月に都の指定有形文化財に指定されたときの指定理由が書かれております。その指定理由の最後3行読ませていただきますと、「本件は、民家としては都内で最も古い時代の特徴を残すと共に、近代に至るまで民家建築の変遷の過程を示すものとして、かつ江戸近郊の名主階級の発展の歴史を示すものとして歴史的・学術的価値が高い」との評価を頂いております。

続いて、その下、本田家の資料についてでございます。資料に記載のとおり、約7万点もの膨大な資料が主屋内及び蔵の中に残されていました。種類も様々で、馬医・医者関係、書画・篆刻関係、また新選組の関係、国立大学町の開発関係などございました。特徴的な資料のごく一部ではございますけれども、薄緑色のパンフレットを全部開いた状態、一番開きますと中に資料一部書いてありますので、併せて御覧いただければと思っております。

続いて、現在行われております解体・復元事業のスケジュールについてでございます。資料2-1の1ページ目の一番下を御覧ください。平成21年まで住居として使われていました本田家ですけれども、平成28年度に寄贈いただき、現在解体・復元事業を行っております。現在実施設計の最終段階であり、今年度下半期には復元工事に着手したいと考えております。復元工事は令和7年12月完了を予定しており、令和7年度中の公開・活用開始を予定しているところでございます。

続いて、主屋復元後の活用方法についてでございますけれども、現在活用計画策定に向け、内容を検討しているところでございます。資料2-2を御覧ください。「旧本田家住宅利活用コンセプト（案）」となります。このコンセプト（案）でございますけれども、活用計画の策定に向け、下谷保町内会をはじめ、老人会、子ども会、また近隣施設であるやぼろじ、観光まちづくり協会、商工会青年部・女性部、また併せて新選組の関係で連携を想定いたしまして、日野市の文化財担当にヒアリングを行っております。これらのヒアリング、また上位計画や旧本田家住宅保存活用計画を踏まえまして、コンセプト（案）として市役所内部で合意を取ったものとなっております。

内容について、簡単に説明させていただきます。まず全体コンセプトですけれども、「南部地域の歴史文化の発信拠点」といたしました。これは、江戸時代から住宅に刻まれた本田家と谷保の歴史文化を守り、新しい活用により旧本田家住宅を開き、新たな南部地域の魅力を市内外へ発信することで次の世代へつないでいくということを意味しております。

全体コンセプトの説明の中に、「まもる」「ひらく」「つなぐ」という3つの単語がございますが、これらの単語を基に、3つのコンセプトを設けております。

まず、1つ目が「旧本田家住宅を『まもる』」でございますが、旧本田家住宅と資料を守り、歴史を伝えていくこととし、また、そのために市民の皆さんと長く維持できる仕組みをつくっていくこと

としております。本田家ですけれども、先ほど申し上げましたとおり、馬医、地主・名主、医者、文人・書家といったように様々な分野で活躍してこられたことを通じ、下谷保地域だけにとどまらず、多摩地域や今でいう東京都の区部の様々な方との交流がございました。そういった点も含めまして、歴史を伝えていく必要があると考えているところでございます。

次に、2つ目、「旧本田家住宅を『ひらく』」ですが、文化活動の場として、イベントや作品展示の場として、またオープンスペースとして開いていくこととして、計画しております。

最後に、「旧本田家住宅から『つなぐ』」でございますが、これは周辺などの関連施設と連携しながら、観光による回遊性の向上を図ること、また希少な植生が残る屋敷林や昔ながらの空間を、いわば将来に向けてつないでいくことから「つなぐ」としております。

資料2-2のその右側に例示でございますが、活用イメージを書いてありますので、御覧いただければと思います。活用イメージの中で1つ補足させていただきますと、下から2番目に自然体験、遊び場とございますが、こちら、旧本田家住宅北側についても敷地を寄贈いただいた関係で、すぐ北側にありますちびっこ広場と接続ができるようになったことから、自然体験、遊び場というところで書かせていただいているものでございます。

また、最後に資料2-3でございますが、こちらも検討中のものでございますが、今説明させていただいたコンセプトを踏まえた活用とした場合の主屋の各部屋の使い方のイメージをまとめたものでございます。説明については割愛をさせていただきます。

全体説明は以上でございます。

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。

それでは、先ほどと同様にフリートーキング形式で協議をお願いいたします。

永見市長、よろしく願いいたします。

○【永見市長】 では、活用をどうしたらいいのだろうか。参考にしたいということですので、フリーディスカッションで行きたいと思います。私が谷保の人間ではありませんので口幅ったいことはいませんので、佐藤委員も谷保のところに嫁いだ女性として、地元の女性として、どんな活用がいいですか。

○【佐藤委員】 本当に町内会のエリアになっているので、本田さんの暮らしは地元の方も尊敬された方だったでしょうし、この資料を見ても、いろいろな人のためにご尽力された方なのだなということも分かりますので、そういうことが子どもたちに引き継がれていく場所になってほしいなというふうに思っています。先ほどちびっこ広場のお話もありましたが、今建て直しの場所だけではなく、少し広げた谷保の地域として捉えて、ちびっこ広場の側には馬小屋も建てました。馬との歴史もありますので、コミュニティ・スペース、コミュニティ・スクールにもつながるような場所になっていくといいなというふうに思っています。

○【永見市長】 よろしいですか。では、あとはよそ者の人たちから意見を。

大野委員、どうですか。

○【大野委員】 あの建物自体を大人も子どもも見ることですごく。僕なんか好きなんですけど、ああいう古民家が。だからいいかなと思ったのですけれども、井田課長によると家を見るだけというのはどうもあんまり人が寄らないらしいのです。

だったら、例えばあそこでイベント的なことをやるとか、香道をやるとか、それから茶道とか華道とか、ときには落語家を呼ぶとか、そういうことで目玉をつくって、少し注目をさせて広めていくと

いうのも1つかなと思うのですけれども、1つの南部地域の目玉になればいいなというふうに思っておりますが、そんなところです。

○【永見市長】 操木さん。

○【操木委員】 今おっしゃったように、本当に人が来ること、見てもらうこと。まず訪れて見れば、感動して、その感動を伝えて、人をまた呼ぶということが繰り返し行われていくと思いますので、まず呼ぶための何かきっかけになるようなことを考えなくてはいけないかな。それは今言われた幾つかのイベントもあるでしょうし、まずそこから始まるかななんていうことを思いました。

それから、「まもる」「ひらく」「つなぐ」というこの3つのキーワードがありましたけれども、まさにこのとおり。特に「つなぐ」という点では、こういった歴史的なものは国立以外にもいろいろな地域にありますよね。地域によっては1か所に再構築して集約して、そして人がそこに集まるという、建物も集まっているし人も集まるというところもありますし、国立のようにもともとあった場所を大事にして、そこにまた再建、再構築していくという2つの方法があるのですけれども、後者の国立のような場合には、今度はその点と点を結ぶための作戦といいますか、例えばこの本田家だけに興味を持ってもらうのではなくて、本田家と郷土資料館の何かとか、そういった歴史的なマップみたいなものもできていますけれども、そういったものを使って子どもたちの歴史マップラリーとか、それから大人も巡って、いろいろなことを全部回っていきけるような、そして点と点がつながって1つの国立の歴史が学べるような、興味を持てるような、そんな作戦も必要なかななんていうことを思いました、この「つなぐ」というところにすごく期待を持った次第です。

○【山口委員】 一番のそよ者でございますけれども、活用イメージのところの下から5つ目、上から3つ目、まち歩きというところの1つのポイントにできるのではないかなとか、このパンフのところに谷保天がちらっと出ています。歩いてすぐなのですけれども、ほかにも先ほど言われましたように古民家だったりとか郷土文化館とか、いろいろなものがありますし、もうちょっと言うと、先ほどの前のテーマのときに最初に言われていた雨が降って田んぼに今水が来なくなったとか、逆に言う水というのをまだすごい活用しているエリアですよ。本当に農家さん今困っているのではないかなと思うのですけれども、そういう水の部分とか、様々な自然に生かされた地域である国立を知らしめて、来ていただく1つの大きなポイントになる可能性があるのかなと。

今まで、何となく私のイメージだと点がぼつぼついろいろなところにあるのになかなかそこがつけられないというようなところで、うまくつながるようなことをこれをきっかけにしてできていくいいのではないかなと思うので、政策経営部長もいらっしゃるので、ここら辺はきっと考えられるのではないかと勝手に思っていますけれども。

以上でございます。

○【大野委員】 すみません、私も同じようなことを前もお話したのですけれども、ぜひ子ども向けのものとは大人向けのもの。やはり子ども向けのものでは大人は満足しませんし、大人向けですと子ども難し過ぎますので、やはり子どもバージョンと大人バージョンの今言った歴史マップではないですけれども、スタンプラリーとか、そういったものができるようなものをつくって、国立の歴史に関わる総合的なものというもの、その中にこれを位置づけてほしいななんて思いました。すみません。

○【永見市長】 教育長、どうですか。

○【雨宮教育長】 谷保といいますか、南部というところで見ると、国立では矢川の矢川プラスのことがすごく取り上げられていて、いい意味ですごくハレーションが出ているのではないかなみた

いな部分があると思うのです。では次は谷保地域、矢川ではなくて。

そもそものものは全然違うのですけれども、市の南部の西側の部分、今度東のほうでもうちちょっと外に打って出られるようなもの、あるいは中、国立市内でもいいのですけれども、すごくいいものができたね、また行ってみたいねみたいな、そういうような機能が付加できるといいのかなというふうに思います。

当時、私も職員で関わっていたときに、これはすごく歴史的に価値があるものだから、一番最初の形で残すのがもう自然なのみたいなのが、学識の経験者の方からそういう発言が出たわけですが、それだけでは投資に見合うものは返ってこないだろうと。学術的にはすごく価値があるだろうけれども、一定の同じ金額を投資するのであれば、やはりそれに対する見返りが必要ではないかなということで、そこにやはり付加価値をつけることが必要だろうなというふうに私はずっと前から思っていたところなのです。そういう意味で今活用案が出てきているので、これをぜひ、生涯学習課でいろいろな形で考えてくれていますが、先ほどあったちびっこ広場の形と一体となるということがあるので、もう少し庁内的にいろいろなアイデアを募って、もっとこういう活用方法があるのではないのかなものを模索してもいいのかなというふうに思っています。

それと、市長、ぜひあそこのバス停、「国立府中インター入口」は例えばそれでも、そのままでいいのですけれども、やはり「旧本田家住宅前」という副題みたいなものをぜひこれは入れましょうよ。それがメインになってもいいのですけれども、あとあそこの交差点の道路の表示もそうなのですよ。あれを何とかしてやりたいなというふうに私は思っています。

○【永見市長】 変わると思うよ。そう思っていたら。

○【雨宮教育長】 私は以上です。

○【永見市長】 ありがとうございます。軽く皆さんにアドリブで発言していただいてありがとうございます。さて、これで終わりにしてしまったらちょっと申し訳ないので、逆に何点か聞いてみたいのですけれども、旧国立駅舎を復元するときは大変な盛り上がりがあって、で、本田さんですよ。地元では、お住まいになっていたということもあるのだけれども、本田家というのは「家」と書いてあるから有形しか考えていないのだけれども、本田家が持っている無形的な部分、歴史性。1600年代から続いている、そこで発信してきた文化だとか医療だとかという様々な地域社会、あるいは江戸との交流だとかというのがあったわけで、そういうものと地元とのつながりというのが、非常に地元から見ると、ここにもあるように、あの時代の名主さんの位置というのは物すごく上であって、それで本田さんのところに上がることをすらできないというのが多くの方のあれだったわけですよ、佐藤さん。

○【佐藤委員】 はい。

○【永見市長】 佐藤さんの義理のお父様のお家などは上がったけれども、ほかの方は上がれないみたいな、そういうことも現実にあったわけですよ。

そういう中において、建物の活用ということと、「つなぐ」と言ったときにそこに延々として築かれてきた本田さん。本田家という家ではなくて、建物ではない本田家が持っている文化性みたいなものをどういうふうに発信しながらうまく活用していくかという、そういう重要な要素があるのではないかなという気がするのですけれども、佐藤委員どうですか、私が言っていること。

○【佐藤委員】 お医者さんだったということで、村の方たちには無償で診察をしていただいたというのを聞いていたり、病気の方が馬に乗って、薬医門は、そのまま馬で入ってきて診察を受けたと

かということだったり、助産院といますか、出産を見てくださっていたということで、あその場所で赤ちゃんが生まれていたのかなというふうにも思いますし、地域のためにすごく助けてくださった方というふうに聞いています。

本当に格式高い方ということで、本田家のことを、地域の方は割と知らないのだよねということも聞いています。

○【永見市長】 知らないのですよね、みんな、地元が。そうなんだよね。だから、そういうのをどういうふうに、今風にかみ砕いて継承していくかという。ちょっと違う側面もあるのかなという気はするし、それからもう1つはそうやって地域貢献を非常にやってくださった方だから、みんなからすごい尊敬の念を集めていた方なわけですよね。だから逆に足も向けられない。だからちょっと別格の存在だ。

だから、地元でヒアリングしたら、あんまり派手に活用しないで、そっと静かに置いておいてほしいんだというような意見もあったというふうに僕は聞いているのですけれども、そういう奥深いところの地元の方々の意思と、それから観光との結びつきみたいな、それからにぎわいみたいなものをどういうふうに調整していくのがいいのかなんていうのは私自身よく分かっていないのですよ。

だから、皆さんがどういうイメージ持っているのか。だから、必ずしもあその文化というのは国立の南部の文化の顔ではなくて、もっと広域的な1つの文化の集約点だったような気もするのです。そういう視点もあっていいのかなと。『ターヘル・アナトミア』が出てきたときに郷土館で飾ったけれども、やはりびっくりしますよね。あそこから解体新書が出てくるわけですから。そういうような歴史性だとか、家が持っている価値みたいなものと建物の価値と、それから現代の文化をどう発信するかみたいなことをどう結びつけていくのかという、それをこの3つの言葉でつなぐ、語るのだったらどういう形がいいのかなと、私が評論家的に言っていますが、どなたかご発言いただけますか。

○【雨宮教育長】 ちなみに、下谷保町内会の方々にヒアリングをしたり、あるいは町内会の方々が集まって、何かいろいろ話をされているというようなことも聞いているのだけれども、そのあたりのどういうことが話されているのかとか、今市長がおっしゃった、「いや、やっぱりあの閑静なたたずまいがいいのだよね」というのは、今のご高齢の方が多いのかもしれないのだけれども、その辺の情報提供をしていただける部分というのはありますか。すみません。

○【井田生涯学習課長】 町内会はヒアリングさせていただいて、正直様々意見はあったのですけれども、先ほど市長おっしゃられたように、普通の公共施設として使ってはもったいないので、やはり保存を第一に考えるべきというようなご意見もありました。

また、例えば谷保天満宮のお祭りの準備をするのに、そういった活動場所に使ってはですとか、活用的なご意見もあったのは確かなのですけれども、何といたしますか、思ったより保存ですとか大事にという意見が多かったなというのが、印象としては持っております。

○【永見市長】 だから、国立地区の人って、今、本田家は始めているから分かっているけれども、昔全然知らないよね。社会教育関係で文化財の保存に関わっている人たち、古文書整理している人たちとか以外あまり知らない。そんな価値のある建物があってというのはほとんど知られていなかったよね。

だから、その辺の取り合い、どういうふうに活用するときにやっていくかというのも1つのポイントになるのかなという気はしていますよね。

ほかに、この際ですから何か。そういう話聞いてしまうと、あまり使うなみたいに俺が言っている

ように思うので、そうでもないのですけれども。

○【操木教育委員】 使う話ばかりしていたからちょっと考えてしまう。

○【永見市長】 いや、活用ということで。

○【井田生涯学習課長】 ただ、一方で例えば観光まちづくり協会ですとか商工会などですと、やはり厳しいご意見として、一般的な古民家レベルの集客だと厳しいので、やはりどんどん人が来るような取組をすべきですとか、今いろいろインスタとか撮影場所というところで、世の中そういう流れになりますので、撮影スポットとしていいのではないですかとか、何かキッチンカーみたいなものを呼んで食べられるようにですとか、マルシェのようなものできないかとか、そういったご意見はほかの団体さんからは多く頂いております。

○【永見市長】 どうですか。

○【雨宮教育長】 今回の議会でも、甲州街道の2車線化のことが議論として出たと思うのですけれども、新たな今造っている3・3・2号線とかが東八道路とつながって新たな道路ネットワークが構築されると、車の流れは違ってくると思うのです。国立の中を通るというよりか、そちらの周辺に寄るといえるのですか。そうすると、アイデアで申し訳ないのですけれども、例えばこの間ジューンFESTIVALやってあそこの旭通りで人力車が走ったみたいな話を聞くと、旧国立駅舎から本田家のほうに向けて、例えば日曜日だけとか、人力車が走るとか、車の流れが多分変わればの話なのですから、そういうアイデアも面白いのかななんていうふうに、個人的にはちょっと思ったりしました。

○【永見市長】 そういう意見だそうですね。何でもいいですよ。まだ開けてみないとわからないのでね。観まちは当然積極的に活用したいわけですよね。ただ、地元の意向とか本田さんの意向とかあるから、村にまだお住まいなわけだから、そういう部分も斟酌しなければいけないし、なかなか難しいかなと思うのですけれども、そんなところですかね。

ただ、観まちの新しい理事長にあそこでやるとしたら何したいかと言ったら、本田さんはやはり篆刻があったから、だから、篆刻をみんなでやってみるみたいな、そういうような企画をああいうところでやって、本田家の価値を知ってもらって、次また来てもらうようなことにつなげるだとか、書画とか、そういうような、あそこの本田さんの、本田家が持っていた文化の延長線上で何か企画をして、それに賛同している人たちが来て、あそこにそういうものがあるのだというので次の人を呼んできてもらうみたいな。そういうような企画ができればいいよなというようなことは今日、実は午前中観まちとはちょっと話し合っていたのだけれども、そんなこともアイデアとしてはあり得るのかなという気はしますけれども。

あそこに薬草を置いたらどうなの。あの庭に、江戸時代に使っていた薬草を、昔はあったというのだよね。庭からあの辺に、それを煎じて薬として使ったとかね。ただこの前調査やったら、もう全く残っていなかったというのだけれども。そんなのだって考え得る。あそこの薬草植物園か何かの協力を得て、当時だったらどんなふうな薬草でどうだったとか、そんなのだって、そういう文化の伝統の上に活用を考えてみるとか考える。知恵出すのだったらそんなのだってあるかもしれない。

俺ばかりしゃべってもしょうがないので、山口委員。

○【山口委員】 今、本当にいろいろな顔というか、この時代だったらそうなのかもしれないけれども、お医者さんであって、今の書家とか、これに全部出ていますけれども。あと、自由民権運動も入っていますから、明治時代から先進的な時代を先駆ける考えを持っておられて、国立の開発も関わっていたというふうに書いてありますけれども、いろいろな側面を持っていらっしやっただったの

だな、方だったのだと思ったので、どこかに焦点を当てるか、どうするか。新選組だけでも地域との連携がたくさんできますよね。日野とか他にも広がって、様々な可能性はたくさんあるのだろうなと思いつつ、今ちょっと聞いておりました。

あそこが寄附していただけたときに教育委員で見学に行かせていただいて、あのときはまだ何も手を入れていないときで、気をつけて歩かなければいけなかったのですけれども、今写真を見ながら、昔の写真とか見ながらこんな感じ、もっと大変だった。がたがたしていたような雰囲気だったのですけれども、すごい歴史は感じたのを今思い出しながら見ておりました。

以上です。

○【永見市長】 今日午前中観まちの連中と話していたのですけれども、本田覚庵さんというのは五日市街道の砂川七番行って書を書いているのだよね。大のぼりを。でかい旗を。その旗は今立川の歴史博物館にちゃんと保存されていて、よいと祭りのときに何十年振りかで揚げたのですよね。

僕は今のお嬢さんと一緒に行って、それを揚げるのを見てきて、挨拶してくれとやったのだけれども、だから、意外と川向こう、甲州街道の文化とつながっているだけではなくて、ここの国立地区の山を越えて砂川まで行って、大酒一升食らってから書いたという有名な逸話があるのだけれども、その当時使っていた筆があそこにまだ残っていましたよね。本田家の中に置いてあるのだけれども、そういうようなつながりがあるとか、それから自由民権がある。

今年多摩東京移管130周年でしょう。これ、何で東京に移管になったかという、自由民権は神奈川の向こうから国立のほうにずっと来ていたのですよね。町田とかでしょう。町田と神奈川県側をぶった切るために神奈川県にあったものを東京に移管させて、区域を分断させるためにやったというのが、これは定説なのです。自由民権を波及させないために。

だから、それが明治になってからでしょう。その前から本田家は自由民権の初期の頃の1つの拠点になっていたとか。だから、そういうような歴史的な問題もちゃんと伝承しながら、建物ではなくて家として、活用をどうそういう延長線上に考えられるかというようなものもあつたら楽しいなど。私は個人的には趣味として思っているだけなのだけれども、思います。

参考になりましたか。いやいや、違う。だって今日は意見を言っていて。言い残した方いらっしゃいませんか、こういう活用というものを。よろしいですか。ではまた何かありましたら、事務局のほうに届けてください。

では、私のほうはこれで。

○【橋本教育部長】 皆様、様々なご意見ありがとうございます。今日は2つの協議・調整事項をさせていただきます。事務局も本日頂いたご意見を踏まえまして、様々なことを前に進めていければというふうに考えているところでございます。

それでは、お時間も定刻、予定していた時間となりましたので、最後に市長より閉会のご挨拶をお願いいたします。

○【永見市長】 どうも今日はありがとうございました。1点目は非常に難しい課題で何をしゃべったらいいか、どう集約したらいいか、集約はしておりません。

まだこれから教育委員会内部で十分検討して、いい開かれた学校からもう1つコミュニティ・スクールへと脱皮できるよう努力してもらえたらと思います。

2点目の本田さんは、これはもう全市的に、市民が国立の新しい、隠れているけれどもこういう文化、本当は国立駅を中心とした大学町の文化よりもずっとずっと古い根底の部分の文化が実は国立に

はしっかりあったのだと。

それはあそこから、実は文化の集約点で発信していたのだというぐらいの視点を持って、どう活用していくのかということを考えてもらえたらいいなと思います。

今日は様々な意見を教育委員さんから頂きましたので、事務局は後で整理して、次へつなげていただけたらと思います。以上、集約させていただいて、今日の教育会議を終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。

○【橋本教育部長】　ありがとうございました。

では、これをもちまして、令和5年度第1回総合教育会議を閉会といたします。皆様、どうもありがとうございました。お疲れさまでした。

午後2時29分閉会